
優等生で問題児

紅場シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生で問題児

【Nコード】

N2432Y

【作者名】

紅場シキ

【あらすじ】

ある日幼馴染みに殺された！？
殺された理由は神が間違えたからだとか
能力もらって転生のテンプレだ
異常で過負荷で優等生で問題児で正義で悪な
主人公が送る物語

第0箱（前書き）

初投稿なので駄文があると思いますがよろしくお願ひします

第0箱

「知らない天井だ」

というか一面真っ白だった

なぜこんなところにいるか考えるがわか

「死んだんじゃないよ」

後ろから聞こえてきたので振り替える

そこには小さい女の子もとい幼女がいた

「幼女じゃないわ!」

心を読まれた!

「当たり前じゃワシは神じゃからな」

神ねえ、で、その神が何の用だ?

「うむ、お主を間違えて殺してしもうてな」

なるほど、死因は?

「やけに落ち着いておるのう、まあよいお主の死因は幼馴染みによる刺殺じゃ」

・・・あいつが、ならいいや

「ム、良いのか?殺されたんじゃないぞ?」

良ささ、だって幼馴染みに殺されたとかかなり非常識だろ?

「そ、そうか・・・まあお主がよいならよいのだが」

それよりまだあるんだろなんか

「そうじゃったお主に転生させてやろうと思つてな」

転生か、どんなところだ?

「お主の世界にあつたためだかボックスというところじゃ」

めだかボックスか力は?

「もちろんつけてやろう、ほれ好きにだけ言うがよい」

じゃあオリジナルの過負荷で『非常識』(ノットルール)と『穴埋

め』(メイクアップ)だ

「ふむ、どんな能力じゃ?」

否常識のほうは否定する能力で穴埋めのほうは否定したところに別の
もので穴埋めする能力だ

「なるほど、大丈夫じゃほかには？」

あとは見ただけで全てを理解できる目をくれ

「わかったのじゃこの目を使いたい時に念じれば見えるようにして
おこつ」

ありがとうもういい

「もうよいのか？」

いやもう十分チートいやバグだよ

「わかったそれじゃ送るぞ？」

ああ頼む

すると光が集まってくるそれに包まれるとそこには神だけしかいな
かった

こうして主人公の転生生活は始まった

第1箱

どうも転生者の悲惨可憐ひさんかれんです

3さいです。ん？飛びすぎ？いやいや光に包まれたあと赤ちゃんだったんだよあとはわかるでしょそれで3さいまでは記憶を否定していました。

今病院に向かっています。なんか急に性格が変わったからびっくりしていたけどほかにもあらゆることができ恐怖が出てきていますね目で見ましたww

あっ着きましたねまあ演技でもして普通にしてみようかな？
待ち時間二時間だと！しかたないか

キングクリムゾン！

とまあ次は俺のばんですそれじゃあ扉を開けて

「隣の晩ごはーん！」

「へっ？なにになに！」

中に居たのは幼女でした

「どうも悲惨可憐です。3さいです！」

「えっ？ああ可憐ちゃんね」

そっついえば忘れてました性別は男の娘・・・間違えた男の子だ見た目まんま女の子だけどね

声は田村ゆかりを想像してくれ

「お父さんとお母さんは？」

「トイレに行ったきり戻ってこないですよ？」

「っ！そうなの」

「まったく捨てるにしても捨てかたを考えて欲しいですよ」

「君は自分が異常だとわかってる？」

「そりゃあここに来てるのだからあたりまえだろ」

「まあいいや、終わりでしたらおいとまさせてもらいます」

「ちよつと待って、どこに帰るの？」

《どこでもいいだろう。》

そう言っつてそのまま立ち去った

残された医者、人吉瞳は先程の少年の事を考えていた。確かに容姿や声は異常だが他のところに異常はあまり見て取れなかったが、最後に発したあの一言が異常さを全面的に押し出させた常識が螺子曲げるところかそれが正しいかのように思えた。あの子いままでの子とは格が違うあの子には絶対に勝てない！
そう思う瞳の目は恐怖が宿り体が震えていた

第2箱

どうも転生者の悲惨可憐です今日から中学生だぜ
またとんだ？気にすんな特に何もなかったから
にしても暇だね何か面白いことねーかな

【新入生代表 球磨川禊さんお願いします】

…は？嘘だろここで原作介入しなくちゃいけないのかまいつか

『えー』『モブキャラのみなさんこんにちわ。』

グシヤッ

ブツちよつと笑っちゃったぜ

『どうしました個性なきみなさん』

『怪我はありませんかその他大勢のみなさん』

『気分が悪いのなら早く帰った方がいいですよもう出番のないみなさん』

あーハッハッハアハアハハあーハッハッハヒーヒー

もうだめだおかしすぎるしかもそのまま退場してるしどーすんのこれ？

【えー多少問題が起りましたが次に進めます】

そのまま続けた！やるきあるなあ

このあとはつまらないので

キングクリームゾン！

始業式が終わって帰っている今校門

『やあ』

はいいきなりきました原作介入

「何ですか？」

『君は僕の過負荷をくらっても普通どころか笑っていたからね』

『どんな子が気になってね、思ってたより普通かな？』

「そうですか球磨川君は物凄く最低だねそれじゃ帰るね」

『うん、また明日とか』

球磨川君に背を向けて

ザクツ

「はい？」

あれねえ？螺子が刺さっている

「はあ、球磨川君？何の冗談だい」

『あれ？過負荷にならない？』

《球磨川君？釘を刺しとくけど。》

《君では俺に勝てないよ？》

言いながら刺さっている螺子を抜くそこには傷がなかった

『君も過負荷だったのか劣等感が出てないからわからなかったよ』

《俺は異常であって過負荷だからな^{プラス}》

『矛盾してるけど君らしさが出てるみたいだね』

球磨川はくるつと踵をかえし帰っていく

『あゝあ、また負けちゃった』

《ふう、やっと終わった》

そう言っつて自分の家に帰って行った

第3箱（前書き）

どうも投稿者の紅場シキです

今回は主人公が自己紹介するシーンを入れて書きました戦うシーンは原作開始からにします

第3箱

やあ皆、転生者の悲惨可憐だよ

球磨川君とお話したあとは特に何もなかったんだけどね？おやすみなさいしたらね？

目の前にいるわけよ

「やあ、こんばんは」

「こんばんは、それであなただは誰ですか？」

「僕かい？僕は安心院なじみ親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「わかったよ安心院さん？」

「君は僕に喧嘩を売っているのかい」

《して欲しい事をしないのが俺の中の常識だぜ》

「可愛い顔して面白い事を言うね」

ため息をつき次の言葉を言う

「君は僕にかてるのかい？この7932兆1354億4152万3

223個の異常と4925兆9165億2611万0643個の過

負荷合わせて1京2858兆0519億6763万3865個のス

キルを持つ僕に？」

《フフフハハアーハツハツハ》

「何で笑っているんだい？」

《勝てるね》

「なんだって？」

《勝てると言ったんだたった1個の異常とたった1個の過負荷でお

前に勝てると言ったんだ》

「君はいつたい何者だい？」

《俺か？俺は異常で過負荷で正義で悪で優等生で問題児なただのバ

グキヤラだよ》

「フフフやっぱり君は面白いね僕のスキルが効かないからね、どん

どん

な子が見てみたかったんだよ。」

《お前から見て俺はどうだった？》

「最初見たときは周りと変わらないグズに見えたけど喋り方を変えた途端に勝てないと自覚させられたよ」

《そうか》

「で？結局君のスキルはなんなんだい？」

《教える訳がないだろう？》

「まあいいか、勝手にさせてもらうから」

と近付いてけて俺の顔に自分の顔を近付けて！キッキスしてきやがったやられたこいつには口写し（リップサービス）があつたんだ
つたまあスキルのほうは問題ないがな自分に害になるものの効果を否定してるからな………

……おいいつまでするきだ無理やり引き剥がすちよつとびつくりした顔をしてる

《残念だったなスキルが使えなくて》

「っ！わかつたのかい？」

《いやいきなりキスされたのはびっくりだがスキルを使おうとしたのはわかつた。》

「はあファーストキスだったのにな特に意味がなくなっちゃったな」
《ファーストキスって俺もだがお前はそんなこと歳でもないだろう？》

ピキィイ

「なんだい？文句があるなら言ってもいいよ。大丈夫僕は心が広いからね」（ニッコリ）

《いっいや特にないんだがまっまあファーストキスなら俺も嬉しいな》

「そつそつかい／＼／それならそれでいいんだ、ん？もうそろそろ起きる時間だよそれじゃまた」

《ああ、また》

第3箱（後書き）

安心院さんにフラグを建てました

というかこの主人公に釣り合うキャラ安心院さんしかいなくね？と思いき安心院さんにしました次はまた時期が飛ぶと思いますごめんなさいm(_____)m

また次回も見てください

第説箱（前書き）

どうも紅場シキです

今回は紹介するだけです

第説箱

悲惨 可憐

ひさん かれん

性別 男（男の娘）

性格 非常識

理知的

本作品の主人公。いつもは女っぽい喋り方をするが《》になると男らしいというか上から目線になる。非常識な事が大好きで進んであり得ない事もする。それでも普段品行方正でいろいろ部活等にも参加して才色兼備等とも言われる

異常 『穴埋め』（メイクアップ）

否定したところを穴埋めする能力

小説内ではまだ使われていない

過負荷 『否常識』（ノットルール）

全てを否定する能力

球磨川にやられた傷はこれで否定した

主人公はこの能力を使い死を否定しているので死なない痛覚も否定している。痛みはないだから刺されてもあっさりしていた
もちろん否定した分穴埋めされている

第説箱（後書き）

また話の途中などでいれるかもしねません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2432y/>

優等生で問題児

2011年11月6日03時21分発行